



ジャパニーズ・フィリピーノ・チルドレン (JFC) の父親探しの旅を取材する 映画脚本家・山本みちこさん

やまもと みちこ ● 映画脚本家。国籍はフィリピンだが、日本人の父親とフィリピン人の母親を持ついわゆるジャパニーズ・フィリピーノ・チルドレン (JFC)。2003年に脚本家としてデビュー。2作目にあたる『マキシモ・オリベロスの青春』(デジタルシネマ、05年)は、モントリオール国際映画祭金賞受賞をはじめ国内外の映画祭で50以上の賞を受賞し、高い評価を得ている

ジ

ヤパンファウンデーションは、現在フィリピンで最も注目されている新進気鋭の映画脚本家、山本みちこさんを2007年5月18日から6月1日まで、文化人短期招へい事業により日本に招へいました。山本さんは、国籍はフィリピン人ですが、日本人の父親とフィリピン人の母親を持ついわゆるジャパニーズ・フィリピーノ・チルドレン (JFC) です。今回は3作目となる新作映画の取材を行なうために初来日。ストーリーは、ずばりJFCに関するものだそうです。滞在中はJFCの子どもたち8名からなる劇団「あけぼの」によるミュージカル「The Giftギフト」の日本公演ツアーに同行して、子どもたちの日本人との交流や、父親探しの旅を取材しました。

山本さんは10歳になるまでフィリピンで父親と一緒に生活していたとのこと、今でも父親と文通を続けているそうです。ほとんど父親の顔も知らないJFCが多いなかで、比較的父親との絆が強いほうかもしれません。「The Giftギフト」の劇中で子どもたちの口から語られる父親に対する思いは、自分や家族を捨てた父親に対する「否定」や「憎しみ」であったり、それでもやはりいつかは会って自分の苦しみを理解してもらいたい、認めてもらいたいという「愛着」であったりと、相反する思いが複雑に絡み合っていました。しかし滞在中、山本さんの口からはそうした強い思いは語られません。両親がどのようになり合っているに違いありません。その物語は一人ひとり異なっているに違いありません。そして、書くことを生業としている山本さんは、自分の心の奥底に潜んでいる思いやJFCの子どもたちが抱くさ

(注) 1997年に結成された劇団「あけぼの」の演劇活動は、父親から引き離されたJFCの子どもたちがその経験や感情を表現することで心の傷を癒し、周囲からの差別を克服していくためのセラピー的な役割を果たしています。

↓JFCの子どもたち8名からなる劇団「あけぼの」によるミュージカル「The Gift/ギフト」の日本公演ツアーの浦和公演終了後に開かれたさよならパーティで
撮影：関 暁 (上も同じ)



ままな経験や感情などを掬い取って、そのエッセンスを新しい脚本の中に吹き込んでくれるに違いありません。

山本さんは現在28歳で、文化人短期招へい事業で来日する文化人の中ではほとんど最年少です。幼少のころからとにかく書くことが大好きだったので(木登りが大好きなお転婆娘でもあったそうです)、これからも書くことで表現する仕事を続けていきたいとのこと。また映画の編集や監督の仕事にも関心があるとのこと、まだまだ挑戦してみたいことがたくさんあるようです。これからの活躍が楽しみです。



(内田康子)